

ケイトウの切り花栽培

JA グループ和歌山農業振興センター 技術参与 本田孝志

●はじめに

ケイトウはヒユ科の一年草で原産地はインドです。高温性の植物なので、気温の高い時期は生育が早く、比較的栽培しやすい品目です。短日条件下で開花が早くなるため、10月以降の出荷では草丈がやや短くなることがあるので注意します。

花色が美しく花もちが良いため、お盆の切り花として人気があります。摘心栽培と無摘心栽培がありますが、ここではお盆出荷に向けた無摘心での栽培について紹介します。

●作型・品種

5月上旬に播種し、2週間程度育苗したあと定植すると、8月上旬に切り花ができます。播種から80~90日で切り花ができるようになります。

ケイトウの花は、丸い形のとさか系と棒状の羽毛系があります。お盆に人気のあるのは丸い形のとさか系で、「久留米系」の品種が主力となっています。黄色やオレンジ色など様々な色の品種が栽培されていますが、お盆の場合は仏花需要なので、赤色中心の栽培が良いと思います。

栽培概要

4月	5月	6月	7月	8月
	○	△	□□

○播種 △定植 □収穫

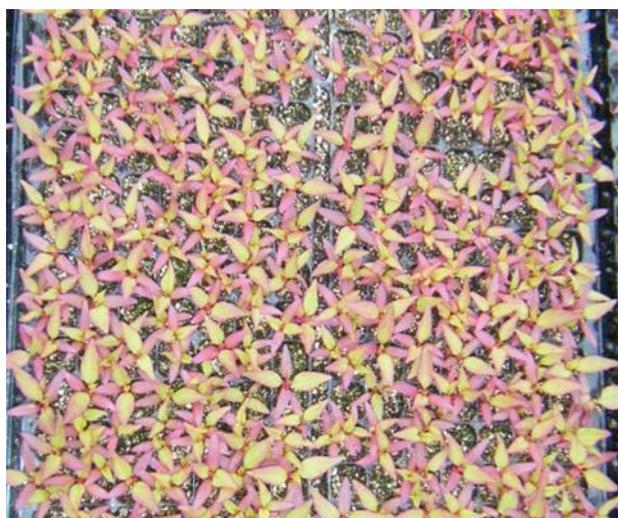
●育苗

発芽適温は25℃で、低温では発芽不良となることがあるので、トンネル被覆などで温度を保つようにします。

288~406穴程度のセルトレーを用い、1穴に1~2粒播種します。種は大変小さいので丁寧に播種し、播種後は軽く覆土をします。育苗時は乾燥や過湿に弱いので、少量の水をこまめにやるようにします。

寒冷紗等で遮光して育苗すると、2週間程度で本葉が3枚程度の定植苗となります。セル苗は、植え付けが遅れて老化苗になると、根鉢が硬くなり、定植後の生育が悪くなるので注意してください。

なお、栽培面積が小さい場合は、セルトレーではなく育苗箱で苗づくりをしても良いと思います。育苗箱の場合は定植作業がやや大変ですが、播種作業や育苗時の管理は比較的簡単です。種が小さいので播きすぎないように注意してください。



セルトレーでの育苗

●定植

日当たりが良く、排水の良い圃場に定植します。基肥を施用した後、幅1.4m程度の畝を立てます。例えば、10cm×10cm、8目のフラワーネットを一段張り、ネットに併せてセル苗を1株ずつ定植します。10アール当たり40,000株以上定植することができます。面積当たりの株数が多いので、定植作業は大変ですが、切り花本数が多く収益性の良い品目です。

なお、基肥は10アール当たり、窒素とリン酸は5~7kg程度とし、カリはやや多めに施用します。なお、前作の肥料が残っている場合は施肥量を減らすようにします。

●栽培管理

活着するまでは水やりに注意しますが、その後はあまり手間のかからない品目です。追肥は生育を見ながら施用するようにしますが、やりすぎないように注意してください。肥料が多すぎると茎が太くなり品質低下の原因となります。草丈が高くなってくると強風により倒れやすくなるので、生育にあわせてフラワーネットを上げるようにします。さらに、2.5m程度の間隔に支柱を立て、茎が曲がらないように注意して下さい。

●病虫害防除

病気はあまり発生しませんが、過湿圃場では定植後に疫病により株が枯れることがあります。花き類に登録のあるリドミル粒剤2などで防除するようにします。

害虫については、定植後にヨトウムシ類による茎の食害、開花後にシロオビノメイガやアブラムシによる被害が発生することがあります。花き類に登録のある、ダントツ水溶剤やモスピラン水溶剤などで防除するようにします。

●収穫・出荷

開花が進み、花茎が硬くなってから切り花を行います。若切りすると花首がしおれることがあるので注意します。羽毛系の品種については切り花時期が遅くなると花形が乱れ品質が低下しますので、切り遅れがないようにします。

切り花後はしっかりと水揚げした後、下葉を除去し出荷販売します。茎が太すぎず、品質のそろったケイトウを生産したいものです。

